教育シンポジウム 1：魅力的な大学院教育ならびに院修了後教育

大学院を修了することで得られるもの：
大学院留学のススメ

富田 洋介*

要旨 国外の高等教育機関への留学には、学問的視野の拡大、コミュニケーション能力の向上、人的ネットワークの構築をはじめとした多くのメリットがある。ただし、国外での学位取得が能力を証明するわけではなく、短期的な専門知識や技能の観点からは国内の学位取得と大差はないかもしれない。留学の価値は、単なる学位取得という「結果」ではなく、異国での生活、学習、研究という「プロセス」を通じて培われる基礎技能の成長にあると著者は考える。これにより、留学は個人の人生を豊かにし、広い視野を持つ社会人を形成する。本稿は、国外留学の現状を概観し、留学における学位取得のプロセス全体とその後キャリアについて探求することを目的としている。本稿では留学が個人の基盤形成にどのように寄与するかを示し、学位取得を目指す学生や教育者に役立つ情報を提供することを意図して、留学準備、入学後から学位取得まで、学位取得後までのプロセスを解説している。

キーワード 大学院、留学、キャリア構築、社会人基礎力、言語習得、奨学金

はじめに

国外の高等教育機関への留学は、学術的な視野の拡大だけでなく、異文化間コミュニケーション能力の向上や新たな人的ネットワークの構築といった多面的なメリットがある。

しかし、国外で学位を取得したからといって、その人の能力についてお墨付きが与えられるわけではない。長い目で見れば、学位取得を目的とした留学は十分な価値がある一方で、専門知識や技能を含む短期的な観点では、必ずしも国内で学位を取得するよりもメリットが大きいとは限らない。それでは、海外留学の価値とは何であろうか。日本学生支援機構の調査データによると、留学経験者の約 55% が留学の経験が「仕事に役立ってい

る」と回答しており、留学して仕事に役立ったこととしては「語学力」、「視野の広さ」、「異文化理解力」、「コミュニケーション力」、「専門性」、「チャレンジ精神」等が挙げられている¹⁾。この結果から、留学によってアプリに相当する専門知識だけではなく、人間としての OS に相当する基礎技能が培われる可能性が示されている。基礎技能の重要性は、経済産業省が提唱する「社会人基礎力」においては、「前に踏み出す力」、「考え抜く力」、「チームで働く力」として表現されている²⁾。著者はこの基礎技能の成長という点に、留学の価値があると考え。近年、リベラルアーツ教育が再注目される一方で、大学では資格取得や社会での即戦力となるための知識・技能の取得といった、専門的知識や技能の早期教育が優先される現実も

* 高崎健康福祉大学保健医療学部理学療法学科 tomita-y@takasaki-u.ac.jp

ある。特に医学・保健学分野の教育機関ではコアカリキュラムを満たすための必修科目が多く、在学中に学生が自由に選択できる科目は限られ、大学での講義を通じた学びは専門職の資格取得という専門的技能に偏りがちである。学位取得型の留学では、最終的に学位を取得できるか、という「結果」のみに価値があるのではなく、情報収集、要件を満たすための勉強といった準備段階から、身一つの状態から始まる異国での生活や講義、試験、研究、そして学位論文審査までの一連の過程（プロセス）こそが、基礎技能の形成や人生を豊かにする大きな価値を持っていると考える。

そこで本稿では、学位取得を目的とした国外留学の現状を概観した後、準備段階から学位論文審査までの過程を紹介する。なお、本稿に含まれる情報は著者の限られた知識と経験に基づいており、主観が大いに含まれた内容である点には注意を要する。

I. 学位取得を目的とした国内外の留学の現状

学位取得を目的とする日本人の海外留学者数は、2000年前後にはピークの約8万人を迎えた後、約6万人で横ばいだったが、コロナの影響で大幅な留学生数減少が生じた2020年以降、コロナ前の水準に戻らず約4万人程度で推移している¹⁾。コロナ以後の大学院留学者数の回復は、学部課程に比べて特に鈍い。

著者が留学したMcGill大学はカナダ東部のケベック州に位置しており、2022年から2023年では学部生を含む全留学生12,001名のうち、日本人はわずか75名(0.6%)であり³⁾、留学生として多いのは、主にアメリカ、中国、フランスがいずれも2,000名を超えている。著者の所属していた研究科では、留学生はフランス、インド、ブラジ

ル、中国等、様々な国から来ており、留学生の割合は50%を超えていたが、日本人の同僚は皆無だった。そのため、交友関係は主に他国からの留学生を中心としたもので、数少ない日本人の友人はお互いに苦楽を共有できる貴重な存在であった。

II. 準備段階

1. メンターを見つけるまで

大学院留学を成功に導くには、指導者の選定が重要である。最終的には指導教員と学生という人間同士のマッチングなので始めてみないと分からない要素もあるが、以下の点に留意したい(表1)。まずは、自らが取り組みたい研究分野を特定する必要がある。これが指導教員を選ぶ上で最も重要な点ともいえる。学位取得までの数年間、あるいは学位取得後も取り組む研究テーマとなるため、自らの興味関心を明確にすることが重要である。

続いて必要なのが情報収集である。大学や研究機関のウェブサイトだけではなく、各教員の研究歴、指導履歴、研究環境、研究テーマに関する詳細を調べる。しかし、ウェブサイト上で公開されている情報から読み取ることができない情報(指導教員の人間性や指導方針、研究室の雰囲気、学生の受け入れ条件等)については、研究室訪問や学会で指導教員や研究室メンバーとの交流を通して情報を得る。他者の意見には主観が含まれるため、最終的には自身の留学の目的や、取り組みたい研究内容、指導教員の人柄、受け入れの条件等を参考にして判断する必要がある。

著者は2012年の3月に日本の大学院で修士課程を終え、博士課程で取り組みたい明確な研究課題が形成されていた。McGill大学での指導教員の研究テーマは自身の研究課題にぴったり合致し

表1 指導教員を決める際に留意したい事項

1. 自らが取り組みたい研究分野を明確にすること
2. 複数の候補教員に関する情報収集を入念にする(研究歴、指導歴、研究環境等)
3. ウェブサイト以外のソースからも情報を得ることに努める
4. 受け入れの条件を明確にする(入学基準、金銭的援助等)

ており、特にその教員の論文が一番読解困難であることも、著者が指導を希望した理由であった。このため、指導教員に連絡を取り、オンラインでの面談を複数回行った。結果として、①大学の入学要件を満たすこと、②資金を自ら確保することができれば歓迎するとの返答を得た。この時点では、指導教員からの受け入れの確約は何もない点に注意が必要である。

2. 大学院の受け入れ要件

受け入れ要件については、大学院ウェブサイトで公開されている。多くの場合は、留学生では語学試験の他に大学学部での成績(GPA)や、Graduate Record Examination (GRE)、ビジネス系大学院では Graduate Management Admission Test (GMAT)等の基礎学力の証明を求められる。

英語圏の大学および大学院で広く用いられている語学試験として TOEFL および IELTS がある。いずれも「読む」、「聞く」、「書く」、「話す」の語学4技能を総合的に評価する。大学院で求められる語学力は、講義・研究・ディスカッションが十分に可能なレベルであることが必要となり、語学試験でも高得点が求められる。特に、日本人は「書く」「話す」のカテゴリが苦手であることが多いため、目指すスコアを明確にし、長期的に語学試験対策に取り組む必要がある。また、大学院によっては附属の語学学校で一定のクラスを修了すると語学試験が免除されるケースもある。この場合、現地での生活を大学院入学前に経験することができるメリットがある一方で、語学学校費用と滞在費が追加で求められるため、経済的な負担が大きくなるデメリットもある。

著者の留学した大学院では、TOEFL iBT で100点以上、または IELTS で Overall 7.0 以上(語学4技能の各カテゴリで6.5以上)が求められた。TOEFL iBT は2年間で計8回受験し、98点までは到達したが残り2点が遠く、結果的に、IELTS の3回目の受験で入学要件を満たすことができた。語学試験の成績が思うように伸びず、先行きが見えない時期は苦しかったことを記憶している。

3. 授業料および生活費の確保

大学院留学生を対象とした調査研究によると、

大学院在籍中の懸念事項のうち、経済的な負担は常に上位を占めている⁴⁾。北米の大学院では、指導教員が受け入れる学生の学費および生活費を全面的に支援するケースと、学生が学内外の奨学金やフェローシップを獲得して学費・生活費に充てるケースがある。当然多くの学生は、指導教員から学費・生活費の援助を受けることができる留学を希望する。しかしそのような指導教員には概して留学を希望する学生が多く集まり、受け入れの要件が高くなる一方で、明確な受け入れ要件を設けていないか、公開していない研究室がほとんどである。

著者は前述したように、面談の結果、「資金を自ら確保することができれば歓迎する」との返答であった。これは裏返せば、全面的に金銭的な支援をする枠では受け入れない、という指導教員からの明確な意思表示である。

4. 奨学金

留学期間を通じて指導教員から全面的に経済的支援を受け続ける場合でも、入学前あるいは入学直後から奨学金やフェローシップの獲得に向けた申請が求められることが多い。資金提供者の母体、応募要件、支給額、支給期間、学位取得後の要件、重複受給の可否、申請時期、選考時期等の情報の収集が必要となる。

著者は留学前に2種類の給付型奨学金に申請し、1年目は両方とも落選したが、2年目には両方の奨学金に合格した。1年目の申請時には論文の実績がなく、指導教員からの許可も得られていなかった。また、研究テーマが不明確で弱かったことも不合格の理由だったと考える。しかし2年目には筆頭の英語論文が1本あり、指導教員からの条件付きに受け入れ許可を得て、研究テーマを指導教員とよく議論して作成した。この時の経験は、現在もグラント申請等に役立っている。

著者の留学中の経済的支出を表2に示した。学費に関して、著者は留学前半の1.5年間はカナダでの一人暮らしで、後半の2年間は妻と子どもと暮らしたため、後半は生活費が増えた。年間の生活費総額は留学前半が約140万円、後半は280万円以上となり、これに学費や渡航費を加えた

表2 留学に関わった費用の内訳概算(円)

	初めの1.5年間		最後の2年間		3.5年間
	月額	年額	月額	年額	合計
学費	141,667	1,700,000	141,667	1,700,000	5,950,000
健康保険料	6,667	80,000	13,333	160,000	440,000
家賃	50,000	600,000	100,000	1,200,000	3,300,000
食費	30,000	360,000	60,000	720,000	1,980,000
その他の費用	30,000	360,000	60,000	720,000	1,980,000
合計	258,333	3,100,000	375,000	4,500,000	13,650,000

額が必要であった。前述したように著者は、事前に指導教員から経済的な支援は期待しないでほしいとはっきり言われていた。そのためこれらの費用に関して、準備段階で奨学金獲得に向けた取り組みを継続し、日本学生支援機構の給付型奨学金(旧名称:長期派遣制度;現名称:大学院学位取得型)の給付を受けることで勉学と研究に集中した生活を保つことができた。著者はカナダに滞在した期間のうち、特に前半の1.5年間は寝るためだけの部屋に住み、食事は自炊し、旅行もほぼモントリオール近郊に限ることで、滞在費を節約した。後半の2年間は家族との生活となり、節制しながらも生活を楽しむことができた。上述した学費、生活費ともに現在は物価高の影響で大幅に増加していることが予測されるため、最新の経済状況で見積もる必要がある。

III. 入学後から卒業まで

1. 講義

大学院博士課程で履修する必要がある講義は、大学や研究科によって大きく異なる。著者は1年半で23単位の授業を履修する必要がある。この講義には統計学、研究法、解析手法、プレゼン、ライティング等、研究者の基盤となる知識やスキルに関わる講義が含まれた。語学試験の入学基準を満たしたとはいえ、教員の説明やディスカッションで展開されるネイティブの語学力には圧倒された。著者は、教員に許可を得た上で講義の録音をし、講義後に図書館で録音データを聞きながら復習を繰り返すことで、何とか講義につい

ていくことができた。2年目の後半には博士候補試験があった。博士候補試験の形態は大学や学部・研究科によって様々だが、著者の所属した研究科では、研究テーマに関わる3つのテーマを大学が設定し、3ヵ月間で文献レビューをまとめるというものであった。各レビューは1名の学内評価者と研究分野のエキスパート1名の学外評価者によって審査され、各審査者のコメントに基づき1度の修正機会が与えられるが、2度目で全審査者の合格を得なければそれ以降の単位を取得できない(つまり退学)という厳しいものであった。3ヵ月という期間は長いようで短く、学生の高度の計画性、自己管理能力が求められる。著者が所属していた研究科では博士候補試験の合格率は当時70%程度とされ、途中で挫折する者、合格できず退学となる者もいた。

博士候補試験に合格後は、自らの研究に専念することができる。研究デザインの立案、倫理委員会の承認、データ収集・解析、論文執筆を主体的に行うことになるが、著者は大学院プログラム前半の講義が、後半の研究期間に非常に役に立たと実感している。

2. 学位審査

博士論文は通常、複数名の内部評価者と学外評価者による審査を受ける。学位審査会は「ディフェンス」と呼ばれ、著者の場合は30分間の発表後に、90分間の質疑応答が含まれた。質疑応答では研究の背景知識、方法論、解釈、限界等、様々な質問が飛び交い、学生の博士論文に対する知識・研究スキルとともに、考えを論理的に他者に伝え

る能力も審査の対象となる。この聴衆からの質問と必死に受け応える学生のやりとりが、「ディフェンス」と呼ばれる由来となっている。

厳しく緊張感のある審査会だが、その準備・運営は苦楽を共にした同じ研究室のメンバーが主催するのが通例であった。審査会には審査者、指導教員、研究室のメンバー、研究科の大学院生を含む聴衆が参加する。審査会に参加する大学院生は、同じ研究室や研究科の先輩学生がディフェンスに臨む姿を見て、いずれは自分もその場に立つのだという憧れに似た感情を持つとともに、学位取得のモチベーションを高める。審査会当日は発表者にとって緊張感と達成感が短時間に押し寄せる、生涯忘れられない1日となる。審査会終了後、論文審査者と指導教員からの大量のコメントに対して返答し、論文の修正後、最終提出を行う。博士論文は大学図書館でアーカイブされ、過去の大学院生の論文にまで遡って全て無料でオンラインアクセスできる。

ま と め

留学は個人のキャリア構築や学問的追求に多大な影響を与える選択肢である。留学生の大多数がその経験を職業上有用だと感じ、語学力や異文化

間コミュニケーション能力等の基礎技能の向上に寄与していることが明らかである。特に、学位取得を目的とした留学では、そのプロセス自体が重要であり、準備段階から学位論文審査までの一連の過程が、個人のキャリアだけではなく人間的基盤を形成する。本稿が今後、学位取得を目的とした留学を志す学生や、その過程を支援する教育者にとって役立てば幸甚である。

文 献

- 1) 第5回 教育未来創造会議 配布資料, 内閣官房, 2023.
<https://www.cas.go.jp/jp/seisaku/kyouikumirai/dai5/gijisidai.html>
- 2) 社会人基礎力, 経済産業省.
<https://www.meti.go.jp/policy/kisoryoku/index.html>
- 3) McGill university international student body 2022-2023.
https://www.mcgill.ca/internationalstudents/files/internationalstudents/citizenship_chart_2022-23_oct_31_2022_1030.pdf
- 4) Nature PhD survey 2019 report, Shift Learning, 2019.
https://collegedoctoral.ubfc.fr/wp-content/uploads/sites/41/2020/06/Nature_PhD_survey_2019_Report_v1_1.pdf